

北海道社会学会ニュース

H. S. A. NEWSLETTER

発行：北海道社会学会事務局
〒074-8585 北海道深川市メム4558
拓殖大学北海道短期大学農学ビジネス学科 工藤研究室
Email：hsa.sociology@gmail.com
http://www.hsa-sociology.org/ 郵便振替口座：02760-3-3085

HOKKAIDO SOCIOLOGICAL ASSOCIATION
Haruka KUDO
Takushoku University Hokkaido College,
Memu 4558, Fukagawa, Hokkaido, 074-8585 JAPAN

編集責任者：工藤遥（庶務理事） 拓殖大学北海道短期大学農学ビジネス学科 harukakudoh@gmail.com
〒074-8585 北海道深川市メム4558 TEL：0164-23-4111（代）

会長就任のご挨拶

大國 充彦

北海道社会学会の会長に選んでいただきましてありがとうございます。2年間の任期で、どれだけのことができるのか、心許ないところがあると思いますが、よろしく願いいたします。

この文章を、東京オリンピックがあと一週間ほどで始まる時期に書いています。いつの頃からか、オリンピックは胡散臭くてイヤだなという気分を持つようになりました。国や地域の旗を背景にした映像の見過ぎだろうと思います。

5-6年前に、ある大学の入学式に行ったとき、その大学の法人の立場の制約でしようけど、講堂の壇上に日本の国旗が置かれています。ところが、二階席前縁の手すりから、30枚くらいのさまざまな国旗が横並びに掲げられて、壇上を三方からぐるりと取り囲んでいます。学長の説明では、その大学に留学に来ている学生の出身国の旗だそうです。そういうやり方があるのねと思って、ちょっと良い気分になったのを覚えています。

今回のオリンピックを開催する目的が何なのか、明確な説明を聞いた覚えはありません。こういう雰囲気（雰囲気という曖昧な言葉でしか表現できないのが情けないですけど）は、1941年にアメリカとの戦争の際の指導部にもあったと聞いています。

「当時の海軍士官の多くは「実は戦争には反対であり」「戦えば必ず負ける」と考えていたにもかかわらず、組織の中に入るとそれが大きな声とはならず戦争が始まり、間違っていると分かっている作戦も、誰も反対せずに終戦まで続けられていった」（澤地久枝・半藤一利・戸高一成、2011、『日本海軍はなぜ過ったか』岩波書店、p. vii）。このような雰囲気は、国の政策レベルだけではなく、身近な組織にも普通にあることに気がつきます。

前会長の梶井先生が指摘なさっているように、本学会にとって「会員数の減少は数年来の大きな課題」です。その傾向が大きく変わるとは私も思っていません。けれども、梶井先生がおっしゃるように「ア

カデミックな伝統は残しつつも、知的な刺激と居心地の良い敷居の低さを共存できないか。「社会学する」という楽しさを、もっと広く共有するにはどういう仕掛けが必要か」という点は、本学会の現状に照らして、現実的な問いかけだと思います。顔みえる程度の小さなコミュニティを、「アカデミックな伝統」と「知的な刺激と居心地の良さ」を特徴とする、会員相互の交流の中で作り上げていくという方向性を考えていければ良いと思います。

コロナ禍で大会などをオンラインで開催することが続いています。対面でお目にかかって話をしたいという気持ちが一方ででありながら、他方では、道外の会員の方々が大会に参加するコストは低くなっているというメリットもあるのかもしれませんが、道内外の会員の皆さま、いろいろとお知恵をお貸しいただければありがたく存じます。また、同じ理事会のメンバーの皆さま、2年間、よろしく願いいたします。

来年は第70回という節目の大会ではありますが、肩肘張らずにできることをやっていきたいと思えます。

第69回北海道社会学会大会について

梶井 祥子（研究活動委員長）

第69回大会は、札幌国際大学をホスト校として2021年6月12日（土）に開催致しました。昨年に引き続きZoom会議によるオンライン形式での実施です。「参加マニュアル」の確認や大会前日のシミュレーションなど、事前準備も含め大会実行委員長の品川ひろみ会員、そして野崎剛毅会員、小内透会員には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

今大会の参加者は45名（うち会員36名、非会員9名）でした。昨年もほぼ同数の参加者でした。オンラインでの大会は遠方からの参加が容易であるというメリットもあるのですが、対面での大会より参加数が少ない傾向であったことはとても残念です。地

方学会ならではの対面開催の意義を考えつつ、ポスト・コロナにおける今後の大会開催のあり方については会員の皆様のご意見を広く伺えたら幸いです。

一般報告は7件でした。当日使用の資料は事前に提出して頂き、チャット上での配信を致しました。画面共有をしながらの質疑応答もスムーズで、各報告を丁寧に聞くことができた実感しています。司会をお引き受け頂いた第1部会司会の原俊彦会員（札幌市立大学名誉教授）、第2部会の加藤喜久子会員（北海道情報大学名誉教授）には、あらためて御礼申し上げます。

大会シンポジウムは小内純子会員（札幌学院大学）を座長として、「在留外国人と共生社会」というテーマで行いました。北海道の在留外国人はコロナ感染症発生前の2019年には約38,000人に及んでいます。とくに農業、水産加工業などでは技能習生の労働力に依存する実態が強まっており、政策的な矛盾も指摘されているところであります。北海道の基幹産業を下支えするかたちとなっている外国人の労働環境や定住移行に関わる地域社会の受け入れ状況など、学際的な取組みが一層期待される喫緊の課題領域です。このような背景に鑑み、本シンポジウムの第1報告者として農業経済分野の研究者である宮入隆氏（北海学園大学教授）をお迎えし、第2報告者として定住外国人の問題に知見の深い新藤慶会員（群馬大学）、コメンテーターには人見泰弘会員（武蔵大学）という布陣で臨みました。座長の小内純子会員を中心に事前に登壇者が集まる機会を設けましたが、そこで交わされた熱心な議論が大会にも反映されることとなり、当日の時間の制約が大変惜しまれました。登壇者のご尽力と皆様からの活発な質疑応答に感謝するとともに、この分野の今後の発展を祈念するところです。

総会終了後にはオンライン懇親会を催しました。新入会員の紹介や大國充彦新会長の抱負など、西浦功会員（札幌大谷大学）の司会で和やかな時間を持つことができました。皆様のご協力をもって、充実した大会を無事に終えることができました。本当にありがとうございました。

第69回大会シンポジウム

「在留外国人と共生社会」感想

西浦 功（札幌大谷大学）

昨年来の新型コロナウイルス渦は、我々の社会生活が外国人労働者に深く依存している現状を浮き彫りにしました。例えば北海道夕張市では、外国人技能実習生が来日できなくなったために、夕張メロンの作付株数を2万株（メロン8万玉分）程度減らさざるを得なくなったことが最近ニュースとなりました（「日本農業新聞」2021年5月24日）。こうした現状をふまえて、在留外国人労働者の実態を深く理

解し、かれらとの共生のあり方を探ることを目的として、本シンポジウムが企画されました。

宮入隆先生（北海学園大学）のご報告「北海道における外国労働者への依存深化と地域社会の課題」では、北海道における外国人労働者受け入れの現状や受入体制上の課題についてご報告いただきました。従来の技能実習制度を中心とした体制から、複数の在留資格により本格的な労働者として雇用する体制へ移行するなかで、新たな在留資格「特定技能」による外国人労働者の伸びが目立ち、北海道は特に農業分野でそれが著しいこと等が、統計資料を基に示されました。また、経営規模の拡大や監理団体の複線化が進む現状をふまえると、外国人労働者を一時的労働力としてのみ扱うのは問題であり、かれらの労働環境の改善や地域によるサポートの充実が求められることをご指摘いただきました。

新藤慶先生（群馬大学）のご報告「在留外国人の子どもの教育からみた多文化共生社会」では、群馬県大泉町の事例に基づいて、日系ブラジル人をはじめとする外国人労働者の言語問題の観点から、多文化共生に向けての課題をご報告いただきました。大泉町では製造業の担い手として1980年代後半より日系人労働者の受け入れがすすみ、定住／永住資格を持つ日系ブラジル人／日系ペルー人が多く生活します。日本語指導を必要とする児童生徒のため、同町では日本語指導体制の整備を進めるものの、日系ブラジル人の子どもたちが公立学校で望ましい学習環境を得られていないこと等、日本人と外国人労働者の間の分断が解消されていないという問題点が示されました。その上で、多文化共生に向けた当事者意識を地域に根づかせ、在留外国人の子どもの流動するアイデンティティを受けとめる環境づくりが必要であることが指摘されました。

以上のご報告に対し、討論者である人見泰弘先生（武蔵大学）からは、外貨獲得手段としてベトナムをはじめとする移民送り出し国の動向が活発になる中、外国人労働者が長期滞在することがもたらす諸課題について、分析や考察をいっそう進める必要があるとのコメントをいただきました。そのうえで、外国人労働者の受入体制にかんする諸課題や、かれらの高齢化問題・言語問題の詳細についてフロアを交えて活発な質疑が繰り広げられました。

今回のシンポジウムを通して、我々の生活基盤が外国人労働者の支えなしに成り立たない現実が着実に進行する一方、受け入れる側の当事者意識が追いつかない実態について理解を深めることができました。ひとくちに「共生」といっても実現に向けての課題は山積ですが、多文化共生を授業のテーマとして取り上げる等、できることから実現してみようと思いを新たにしました次第です。

最後に、報告者および討論者の先生方、ならびに本シンポジウムを企画して下さった梶井祥子先生

(札幌大谷大学)、司会の小内純子先生(札幌学院大学)に御礼申し上げます。

第 69 回北海道社会学会総会について

(第 69 回北海道社会学会総会議事抄録)

日時：2021 年 6 月 12 日(土) 16:30~17:20

方法：リアルタイムオンライン

(開催校：札幌国際大学)

議長：野崎剛毅会員

報告

1. 編集委員会報告(角委員長)

『現代社会学研究』第 34 巻は、コロナ禍の状況を踏まえつつ、順次郵送する。

『現代社会学研究』第 34 巻は、在庫状況に鑑み、印刷部数を 160 とした(第 33 巻は 200 部)。

『現代社会学研究』第 33 巻については J-stage への up はすでに済んでいる(公開日は 2021 年 8 月 1 日)。

2. 研究活動委員会報告(梶井委員長)

第 69 回大会の参加者は、会員 36 名・非会員 9 名。

3. 庶務報告(上山庶務理事)

1) 会員異動(2020 年 6 月から 2021 年 6 月まで)
新入会員 8 名・退会会員 2 名・自然退会 7 名で、計 1 名減。6 月 12 日現在の会員数は 122 名。

2) 学会研究奨励金

翁康健会員、胡亜楠会員の申請を採択した。

3) 2020 年度理事会開催

計 3 回およびメールによる持ち回り理事会を複数回開催。

4) 学会ニュースの発行

計 4 号(124~127 号)発行。

4. <年会費減免>導入の議論継続について(梶井会長)

<年会費減免>導入の議論の継続について報告がなされた。

5. 「入会申込書」「研究奨励金申請書」に関する押印・署名の廃止について(上山庶務理事)

事務局委託終了に伴う事務作業の効率化の一環として、押印・署名の廃止を進めた方がよいとの報告があった。

6. 役員選挙結果について(高田選挙管理委員長、代理：上山理事委員)

2021 年 5 月 6 日に開票作業を行い新役員が決定した。

7. 次期理事会について(大國充彦次期会長)

役割分担

会長：大國充彦

編集委員会：高田洋(委員長)、櫻井義秀、中田知生、西浦功*、上山浩次郎*

研究活動委員会：品川ひろみ(委員長)、平沢和司、新藤慶*、樋口麻里*

庶務担当理事：工藤遥

会計担当理事：野崎剛毅

監事：原俊彦*、小内純子*

(敬称略。*は理事外。新役員の任期は大会翌日より 2 年後の大会当日まで)

8. 次回大会の開催校について(梶井会長)

北海道大学大学院教育学研究院(札幌市)で開催することが報告された。

議題

1. 2020 年度決算報告・監査報告(高島会計担当理事・会計監事):資料 1(2020 年度決算報告書)〈略〉提案の通り承認された。

2. 2021 年度予算案(高島会計担当理事):資料 2(2021 年度予算案)〈略〉提案の通り承認された。

第 3 回理事会報告

日時：2021 年 6 月 12 日(土) 12:00~12:30

方法：リアルタイムオンライン

(開催校：札幌国際大学)

出席者：梶井会長、大國新会長、原・小内・角・西浦・水川・高島・上山の各理事、高田・品川・工藤・平沢・野崎・櫻井の新理事。

報告

上記、総会と同じ。

編集委員会より(高田編集委員長)

『現代社会学研究』第 35 巻(2022 年 6 月発行予定)の原稿募集について

①投稿原稿の募集

『現代社会学研究』第 35 巻の投稿原稿を募集します。投稿を希望される方は、学会ホームページから「投稿申込書」をダウンロードし、必要事項を記入の上、学会事務局(hsa.sociology@gmail.com)に宛ててメールの添付書類として送信してください。その際の添付ファイル名は「投稿申込〇〇.doc」(〇〇には申込者の氏名を入れる)としてください。申込の締切は、8 月 31 日(火)まで(同日必着)とします。申込者には数日のうちに事務局から申込書受理のメールが返信されますので確認してください。申込の時点で 2021 年度までの会費が完納されていないと申込は受理されませんのでご注意ください。審査用原稿は「執筆要項」の指定に基づく A4 サイズ 16 枚以内の PDF ファイルとして作成し、10 月 31 日(日)必着で学会事務局宛てメールに添付してお送りください(従来は、投稿原稿 3 部を郵送していただきましたが、これは不要です)。その他の詳細については、学会ホームページに掲載されている最新の「編集・投稿規程」および「執筆要項」を熟読してください。

②書評対象書の募集

『現代社会学研究』第35巻に書評を掲載する対象書を会員の皆様から広く募集します。自薦他薦を問いません。会員の著作（会員の単著、または会員が編著者になっているものが原則）で書評として是非取り上げて欲しいものがありましたら、その書誌情報（著者名、書名、発行年、版元名）を学会事務局（hsa.sociology@gmail.com）までお寄せください。自薦の場合は、書評を書いて欲しい会員名、リプライ付を希望するか否かについてもお伝えください。またできれば書籍現物もお寄せください。特に指名がない場合は執筆者を編集委員会で決定いたします。当該書の発行時期は必ずしもこの一年間でなくても構いません。過去数年に刊行されたもので、書評対象とするのにふさわしいと思われるものについても可とします。締切は、10月31日（日）必着です。情報を集約の上、編集委員会で検討して掲載の是非を決め、結果をご連絡いたします。

③書評原稿および「往来」原稿の募集

書評原稿を募集します。必ずしも書評という形式ではなく、その書籍の内容に何らかの形で言及しながら、ある研究テーマについて展開する内容となっても構いません。また海外事情の紹介やある分野についての最近の研究動向などに触れた「往来」の原稿も募集します。いずれも学術的な内容であることを条件とし、分量はリプライがつく場合は6,000字程度、つかない場合は3,000字程度とします。締切は10月31日（日）必着で、学会事務局（hsa.sociology@gmail.com）までメール添付でお送りください。その際の添付ファイル名は「書評投稿申込〇〇.doc」ないし「往来投稿申込〇〇.doc」（〇〇には申込者の氏名を入れる）としてください。但し投稿された原稿の取り扱いについては編集委員会にご一任ください。「往来」の投稿が少ない場合などには、編集委員会から個別にご執筆をお願いすることもあります。その折にはどうかよろしく申し上げます。

北海道社会学会研究奨励金について

北海道社会学会では社会学研究の活性化と若手の育成を目的として、2006年より研究奨励金を交付しています。下記により奨励研究を募集いたしますので、ぜひご応募ください。

1. 募集件数：2件（1件5万円）
2. 応募資格：本会会員（若手単独が望ましい。若手とは、自分で科学研究費申請ができない地位にある大学院生や大学院修了者等を指す）

3. 条件：奨励金交付後2年以内の本学会大会での研究発表、および2年以内の『現代社会学研究』への投稿を条件とします。
4. 応募方法：まず応募用紙を庶務理事宛て e-mail でご請求ください。ついで応募用紙に下記を記入し、庶務理事まで郵送により提出してください。①研究テーマ、②応募者（氏名・所属）・郵便番号・住所・TEL・FAX・e-mail アドレス、③研究の目的と「社会学研究」としての意味・位置づけ等（具体的に）、④研究の方法と予想される成果（具体的に）、⑤推薦会員の署名と印
5. 提出期限：2021年10月31日（日）必着
6. 提出先・問い合わせ先：工藤遥（庶務理事、あて先は1ページ編集責任者欄参照）

会費の納入について

2021年度会費または未納分会費について、すみやかに振り込み手続きをお願いします。

郵便振替用紙 [郵便振替口座 02760-3-3085]

年会費	一般会員	6,000円
	学生・院生会員	4,000円

2021年度会費を納入されていない方には、機関誌第34巻（2021年5月発行）をお渡しできません。5年間滞納されると、自然退会の扱いとなります。ご注意ください。

会員異動（2021年7月まで）

《入会》

《略》

会員情報の変更届について

住所や所属が変更になったときは、遅滞なく郵便かメールで事務局（hsa.sociology@gmail.com）までお知らせください。その際、e-mail アドレスもお忘れなくご登録ください。ご協力をお願いいたします。

『現代社会学研究』第34巻の発送について

コロナ禍で『現代社会学研究』第34巻も郵送でのお渡しとなりましたが、今年度は理事の交代も重なり、発送作業に遅れが生じております。事務局は2020年3月末の事務委託解除後、新体制に移行しております。会員の皆様にはご不便をおかけいたしますが、今後ともご理解・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。